

育まれる「本当の名前」



What's in a name?

左地 亮子

民博 機関研究員

日本の多くの人にとって、名前とは出生時にひとつ与えられ、その後一生たずさえていくものである。しかし、わたしは調査しているフランスのマヌーシユ(ジプシーの「集団」)は、出生届に記載された名前とは別の個人名を、ときに複数もち、それを「本当の名前」とする。

マヌーシユはたいてい、姓とは別にふたつの個人名をもつ。個人名が複数あることは、一般のフランス人のあいだでもめずらしくはないが、マヌーシユの場合、「パピエの名前」と「マヌーシユの名前(nom manouché)」という独特な区別がされる。

「パピエ」とはフランス語で「紙」を指し、マヌーシユは身分証明書、学校や社会保護制度に関する書類全般を「パピエ」とよぶ。つまり、「パピエの名前」とは書類に文字としてしるされる名前である。マヌーシユの多くは、フランス語話者であるが読み書きをおこなわない。また、彼らの母語「ロマネス」も本来文字をもたない言語である。つまり、マヌーシユにとって、文字とは共同体外部のフランス一般社会で使用されるもので、出生の際にすべての親が子の名前として届け出る「パピエの名前」も共同体の外で流通するものである。「パピエの名前」は、一般のフランス人と同様のクリスチャン・ネームで家族のなかで同名者がいることも多い。しかし、そもそも共同体内部で用いられないので、「パピエの名前」をめぐる不都合は特に生じない。

代わりにマヌーシユ共同体内部で用いられるのが、マヌーシユ語で「ロマノ・ラップ」とよばれるマヌーシユの名前である。こちらは事物の名前(「中国人」を意味する「シノワ」「少年」に由来する「ギャルソネ」)や意味をもたない名前(ジャーム、

グドウ、ブーバ等)など多種多様な響きを持ち、「本当の名前(vrai nom)」ともいわれる。命名の時期や命名者に関する決まりはなく、「いつの間にかこう呼ばれていた」という人またふたつ以上の「本当の名前」をもつ人も多い。マヌーシユが重視するのは、その「本当の名前」が個人にたったひとつあることではなく、共同体内部の誰とも重複していない「その人固有のもの」である点である。結婚などによりあらたに共同体に入った人が、既存メンバーと同じ個人名をもつことはある。このこと自体は仕方がないとされるが、気をつけなければならぬのは、同名者が亡くなったときだ。マヌーシユは死者の名前を口にすることを禁じているため(代わりに、「誰彼の父」「親愛なる祖父」などと表現する)、死者と同じ「本当の名前」をもつ人は、もはやその名前を名乗ることはできない。したがって、もうひとつの「本当の名前」が活用されたり、あらたな「本当の名前」を与えられたりすることになる。

マヌーシユは、「本当の名前」を「あだ名/ニックネーム(surnom)」ともいう。なぜなら、その名前は、書類にしるされる「パピエの名前」とは異なり、文字によって固定されない「音」の名前で、生まれてすぐかしばらく経って、周囲の人びとにその名前で呼びかけられ、その呼びかけに応答するという日常のなかで徐々に定着していくものだからだ(そのため、命名されても定着しない名前は「本当の名前」にはならない)。このように、「本当の名前」が「あだ名」であったり複数あったりする状況は、少し奇妙でややこしい。しかし、日々の他者とのかわりを経て「本当の名前になる」という点で、マヌーシユの名前はまさに個人のアイデンティティと切り離せないものだ。